

平成30年度 第2回(通算58回) ソフィア発見講座(報告)

実施日 平成30年11月28日(水) 18:00～19:30

会場 磐周教育研究所 大会議室

主催 研究所 活動推進委員会

テーマ 「南極観測における人文・社会科学の可能性」

講師

村越 真 (静岡大学教育学部教授・附属学校園統括長)

1 主催者挨拶並びに講師紹介(委員長 川合 康智 向笠小学校長)



みなさんこんばんは。

本日、ご講演くださいますのは、静岡大学教育学部の教授、また附属学校園統括長の村越真(むらこし しん)先生です。村越先生、遠く磐田の地まで、足をお運びくださりましてありがとうございます。村越先生は、日本を代表する心理学者として活躍されています。ご専門は、スポーツ心理学、認知心理学と伺っております。また、日本におけるオリエンテーリングの第一人者として、大変有名な方です。全日本オリエンテーリング大会で、通算22勝という前人未踏の大記録をお持ちです。

さらに、2017年11月からの第59次南極地域観測隊に同行され、研究を進められました。

先日村越先生が書かれたある冊子を読ませていただきました。内容のほんの一部をご紹介します。『南極観測は過酷な環境の中で行われているが、熟達した隊員は致命的な場面を避けるリスクマネジメントを行っているはずである。認知心理学のアプローチでその背後にあるスキルを明らかにすれば、観測隊の事故防止はもちろん、自然体験につきそう教員、あるいはフィールド研究に従事する学生、といったリスクのある自然の中での活動者の安全にも資するのではないか』そう考えて研究を進めたという内容でした。

本日のご講演では、南極での体験談や研究成果等についても貴重なお話を伺えるのではないかと思います。短い時間ではありますが、わたしたちの知らない、様々なことをお教えいただけたらと思います。

それでは、村越先生ご講演をよろしくお願いいたします。

2 講話

1 Youは何しに南極へ?

1956年の11月に第一次南極観測隊が晴海を出発しました。その頃全世界で、地球全体のことを知ろうという自然科学のムーブメントが起きました。日本も国際会議で参加したいことを訴えたところ、一番難しい場所の南極昭和基地を割り当てられたという経緯があります。今で言うと、宇宙旅行へ行く感覚だと思います。第一次隊の中に実は父が含まれています。

南極に自分自身は50歳まで、何の興味もなく生活していました。心理学研究者・大学教員として過ごしました。そんな中、『おもしろ南極料理人』(西村淳)を読み、無性に南極に行きたくなりました。ですが、自然学などの研究者しか南極へ行くことはできなかったの、なかなか機会には恵まれませんでした。そこで、限られたリソース、文明社会から物理的隔絶された環境で、それぞれが対応するためにどのような知恵を働かせるのかというリスクマネジメントについて心理学的視点から研究したいとい



うことを伝えたところ、南極へ行く許可が下りました。

2 南極観測は今・・・



昭和基地から150キロぐらいの場所までが活動範囲です。移動はヘリコプターです。昭和基地は、24時間お風呂に入れたり、24時間飲み放題のバーのような場所があったり、ビジネスホテル並みには快適です。80人ぐらいが共同生活するので、家事全般を分担します。

ブリザードの日は閉じ込められますので、昼間からお酒を飲んだりしますが、皆さん優秀な研究者ですので、その中でも屋内でできる仕事をしています。

夏の間は、設営作業が一番の多い活動になります。足場を組んだり、生コンをこねたりします。

昭和基地を離れると、ラングホブデで熱

水掘削をします。海底の泥や熱水から南極の実態を調査するのです。長い期間滞在するので、一人ひとつテントを張ります。氷は400メートルほどの深さです。なかなかの重労働になります。

南極の氷は、空気をたくさん含んだ雪が積もっていき氷となっていくため白いです。深ければ深いほど昔の雪になるので、三千メートル掘ると、百万年前の空気に触れることができることとなります。

日本の観測隊は、いくつもの世界的観測結果をあげています。例えば、オゾンホールが発見です。これからやろうとしていることは、七十万年前の氷床コアを掘削したことはあるので、百万年前の氷床コアをとろうとしています。

(実際に1～2万年前の氷を持ってきていただきました。水に溶けるプチプチという音を聞きながらみんなで縄文時代の空気を感じました。氷は、内包されている空気の粒が大きく、透明度も高く、とても美しかったです。手にとって見ている方もいらっしゃいました。)

3 日常の生活

二人部屋で生活しました。金曜日はカレーです。なぜ決まっているかということ、曜日感覚がなくなってしまうからなんです。ジムもありトレーニングをします。節分の日には恵方巻きを食べたり、鬼の格好をして夜の見回りをしたりしました。こんなことをやっていないとやっていけないんですよ。

4 過酷な環境におけるリスクマネジメントの実践知の解明

南極へ行き何が分かったかということ、危ないという感覚は、人によって異なりますので、知識が「危ない」という感覚を支えているということです。危ないことに対する敏感さは大切だし、大丈夫だとやってみようとする気持ちも大切で、その両方が必要です。

3 お礼・終わりの言葉（顧問 大村 高弘 磐田中部小学校長）

村越先生の見せてくださった南極の写真は、雪や氷の白さと空の青さがとてもきれいで、体も心も癒される思いになりました。

この5月、南極のお土産の氷でつくった焼酎の水割りを村越先生に飲ませていただいたことがありました。ところが、今日配られた極地隊発行の説明書には「氷の飲食は固くお断りします」の注意書きが…

……。「えっ!？」

でも考えてみると、村越先生ご専門のリスクマネジメント（危険と利益は裏腹）に従えば、「なるほどな」と思えました。南極の様子はテレビで知ることもできません。が、現地でのご経験を元にしたお話は臨場感があって実に興味深く、会場が一体になれた時間でした。

ありがとうございました。

